

さちひろ

発行：天理教狹千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 TEL072-365-2571
E-mail:wat@sachihoro.com url:http://sachihoro.com 編集兼発行人・山口 渡

天理教狹千廣分教会の広報紙

- 1面・みんなの教理入門(11)
- 2面・幸せを届ける言葉
- 3面・連載・おさしづの点滴
- 4面・教会の動き・編集後記

教会の動き

- 朝づとめ…毎朝・6時30分
 - 夕づとめ…毎夕・7時00分
 - 元旦祭…1月1日午前0時30分
 - 春季大祭…1月21日午後1時30分
 - 秋季大祭…10月21日午後1時30分
 - 月次祭…毎月21日午後1時30分
 - 春・秋季霊祭…3月22日・9月22日 午後1時30分
- ※教会の場所は、左の地図の📍マーク。市立公民館の裏・西側です。



■1月1日、元旦祭を執行

今年もいつもと変わりなく始まりました。一月一日は恒例の元旦祭です。午前0時までに献饌をすませて、新しい年が明けてから、家族全員で元旦祭のおつとめをつとめました。座りづとめから一気に十二下りまでつとめました。

去る年は、わが狹千廣(さちひろ)分教会にとつて、初代、二代、三代と代を重ねてちょうど50年目の年でした。来る年今年も、その元一日に思いを復して、感謝・報恩の念を新たにしたいと思っています。

■お節会に参加しました

天理教教会本部では恒例のお節会が1月5日〜7日まで開催されました。本部神殿にお供えされた大きな鏡餅は4日、神殿で鏡開き。大切り、中切り、小切りと三段階に分けて切られ、この3日間で、参拝者の方々に、水菜おすましの雑煮として、無料で振る舞われました。当教会でも5日にこれに参加して、おいしい雑煮を満喫、堪能して参りました。

《編集後記》

▼新年あけましておめでとう(ござい)ます。▼本年もどうぞよろしくお願ひします。▼年末には山口キミ(わたしの祖母)の30年祭、千代子(母・初代会長)の10年祭を執り行いました。また12月21日月次祭には大教会からの巡教があつて、その場でも、わが家の信仰の元一日、そしてこの教会のはじめに何があつたのか、先人はそれにどう対処し、どのような心を定めて通られたのかを、改めて確認する機会を与えて頂きました。その思いを振り返り、新しい年の歩みの拠り所にしたいと念じております。▼そんな話も含めて日々の話題を綴るブログもご覧ください。 <http://sachihoro.com> #やまさんのブログ から入れます。(わ)

わたひろ 第33号

編集兼発行人・山口 渡
平成21年1月8日
大阪狭山市今熊1丁目1133番地
TEL・072136512571

「みんなの教理入門」連載・11 家族の姿

天理大学名誉教授・芹澤 茂



物ごとをよく理解しようとするときは、自分の持っている知識に照らし合わせてみるだけでなく、その物ごとになってみることである。「吾輩は猫である」という小説があるが、猫になってみると猫のことがよくわかる。これは擬人(ぎじん)法的な理解と言われる。

さらに、自分を離れて、自分以外の立場から自分をみることもできる。この心の働きは、普通には、年頃(ごころ)になると自然にできてくるもので、人間が人間らしくなるために必要欠くべからざるものであると言われる。

信仰の場合にも、親神様の立場から自分をみるのが大事である。もちろん、親神様の身になってみることは不可能であるが、その代わりに親神様から教えられた教理の眼で自分をみて反省することはできる。

このような見方がたやすくできるようなこと―それは親神様と心をかよわせていることが必要である―今まで知らなかったような世界がみえてくる。時には、別世界に来てしまったように感じるときもある。日常生活には何の変わりも

ないのであるが、それほど生きるこの意味が変わってくる。

人間はだれでも両親があつて生まれ、育つ。これは自然にそうなっているとしか言えないことである。

ところが、子供の立場からすると、往々にして、「自分はなぜこの親の子として生まれたのか」、「なぜこの兄弟姉妹(きょうだい)と一緒にくらすなければならぬか」、さらに成長して結婚すると、「なぜこの人と夫婦でなければならぬのか」というような疑問がわいてくる。

それは自然にそうなっているもので、疑問を持つてもどうしようもないことである。ということではあるが、いったんこのような疑問がわくと、これを解決する答えは容易には見つからない。

「親子になるのは前生からの宿縁(積み重なった因縁)による」と説明される場合もあるが、かえって、人間生活の全部がうとましいものとなつて、人間をやめようということにもなる。人間をやめるといつても、生まれかわり出かわりするこの世

以外に人間生活はないのであるから、死んで解決できることではない。そこで、「なぜ」という難問を解決するために、色んな教えや宗教に頼ることになる。しかしお道では、親神様にもたれ、親神様のお話（教理）を聞いていくうちに、難問の解決でなく、難問そのものが氷解していく。

親神様は人間が陽気ぐらしのできるように一切を守護しておられるので、「親子になるのはいんねんによる」には違いないが、それは自分の「業（ごう）を果たす」（行為の結果に責任をとる）という苦しみだけではなく、その中に楽しみのある道がある。

何よりも理屈ではなく、おのずからそうなってくる。親神様が人間の親であることがわかってくれば、子供とすれば、「親はえらい」というようにみえてくる。「この親の子として生まれ

て来てよかった」と思えてくる。兄弟姉妹も、「自分がこの人たちと兄弟姉妹として育ったことは有難いことだ」と実感される。「なぜ」という

疑問でなく、感謝の気持ちが起きて、「みな自分よりえらくみえる」というようになる。

夫婦でも同じである。見知らぬ者同士が夫婦になるのであるから、結婚も実に冒険のようであるが、「夫婦というものは親神の守護のほかに頼るべきものはない」ので、この守護がわかれれば、夫には妻が、妻には夫が「宝石のように」あるいはそれ以上に思われてくるのである。

幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよつとひとこと」
(善本社刊) から

母

昔、母からこんなことを聞いた。
「人の一生は、けつして平坦ではない。病氣あり、事情あり、災いの多いデコボコ人生。
『一、二、三』と一歩一歩、
足元を強く踏みしめて、前向きで歩かねば、人生の敗北者になる。
古人は、
『苦勞は人間を鍛える』と言うが、
苦勞に叩かれ磨かれて、
人格が生まれ、
人々から尊敬を受ける。
あなたも人の三倍、苦勞をきなさい」と、
私は教えられた。
亡き母は、
今も私の人生の教科書だと思う。

おさしづの点滴 ⑫

医者の手余りを救うが台

薬を以て治してやろうと言わない。脈を取りて救うが台と言う。

(26・10・17)

【解説】

今日の社会にあっても「拝み祈禱」はかなり根強いものです。禁厭祈禱の禁止は明治時代に政府がずっと一貫して推し進めた政策でありましたが、なかなか改まらなかつたようです。教内でも、信仰をしておれば「医者も薬もいらん」というような熱狂的な信者がいて、社会から医薬妨害と受け取られるというような動きもありました。

修理肥として教えられた医療・医薬

は、だめの教えが開示された今日、おたすけとどういふ関係にあるのでしようか。その微妙な点を端的に示されたのがこのおさしづです。

「やまひのものは（ころから）（みかぐらうた）であります。病氣を治療するのは医者（なす）のなすべきこと、（やまひのね）（みかぐらうた）を切るのがこの道の信仰です。投薬によって病氣を治す、脈をとって治療を施すのは医者の領分です。「元々医者は要らん、薬は吞む事は要らん」といふ事は教には無いで」（23・7・7）と諭されます。おたすけは、むしろ「医者の手余り」、すなわち医者ではどうにも手の施しようのない、当事者の深い心の領域に分け入り、心底からたすかつてもらう道であります。そこにだめの教えの根本があるのです。

「おさしづ全文」

卷三 明治二十六年十月十七日

医薬の件に付、必ず医師の診察を経

て御道上の御話する事情の願

さあく尋ねる処く、尋ねるであろう。ようこれまで話したる処、一時以て尋ねにやならうまい。一時難しいと論したる。何にも難しいやない。一時も早く事情改め。何も今一時改めるやない。薬を以て治してやろうと言やない。脈を取りて救うが台と言。医者の手余りを救うが台と言。なれど一口に話する、聞く。又一つには邪魔になる。放つて置けんと言。よう聞き分け。何でも無ければ何でも無い。身上心得んと言は、そらと言はばそりやという理を論したる。皆論したる。人を腹立てさすやない。前々古き話、人の義理を立て、神の理を欠いては、神の道とは言えようまい。詳しい話をして置こう。所々分かつらうまい。一時改めて医者に掛かねばならんと言はば、又どうと思ふ。派出する。よう聞いて置かねばならん。今の一時泥海世上論す理、病人を放つて置いてはならん。こゝにはそういう者はあろうまいなれど、もし千に一つでもありては道の疵、教の理に無き理である。医者の手余りと言はば、捨てるの同様である。それを救うが教の台と言。よう聞き分けるよう。